

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	張 文 青
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>中国語を母語とする日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程の変容 —中日2言語間の形態・音韻類似性を操作した単語シャドーイングの効果—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男 審査委員 教 授 服 卷 豊 審査委員 教 授 深 澤 清 治</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）を対象とし、日本語の漢字単語の形態・音韻・意味情報を一体化させた連続的単語シャドーイング（continuous word shadowing：以下、単語シャドーイング）の遂行によって、中国語と日本語（以下、中日）の心内辞書における漢字単語の形態・音韻表象の連結関係及び処理経路が変容するか否かを検討したものである。先行研究では、中国人学習者が日本語の漢字単語を処理する際に、中日2言語間で音韻類似性の高い単語が低い単語よりも反応時間が長くなるという、音韻類似性による抑制効果が見出されている。本論文では、単語シャドーイングによって、日本語の漢字単語の処理における中国語音からの干渉が小さくなるかどうかを主な指標として、3つの実験を行った。</p> <p>論文の構成は、以下の通りである。</p> <p>第1章では、語彙表象と概念表象で構成される心内辞書モデルと第二言語の単語認知過程について、印欧語族の言語を扱った先行研究を概観した上で、中日2言語の漢字単語の認知過程に関する先行研究を吟味した。そして、漢字単語の学習における単語シャドーイングの有用性を取り上げ、本研究の問題の所在と目的を述べた。</p> <p>第2章では、3つの実験について記述した。本研究では、日本語漢字単語の属性として中日2言語間の形態類似性と音韻類似性を操作し、日本留学中の中国人学習者を対象として、視覚・聴覚情報の同時呈示による単語シャドーイングの効果を検証した。事前・事後・遅延テストデザインを用いて、語彙判断課題と読み上げ課題を設定し、その反応時間を測度とした。加えて、読み上げ課題時の日本語発音の評定も測度とした。各条件における反応時間の変化及び処理パターンの差異をみることにより、中国人学習者の心内辞書における日本語漢字単語の形態・音韻表象の連結関係及び処理経路の変容について考察した。</p> <p>実験1では、初中級の中国人学習者が、中日の同形類義語500語について単語シャドーイングを遂行した。その結果、語彙判断課題でも読み上げ課題でも、事前テストに比べて事後テストの反応時間が短縮された。語彙判断課題の事後テストでは、音韻類似性による抑制効果がみられ、聴覚呈示による漢字単語の意味処理が、一時的に上級の中国人学習者と同じ経路を辿って行われることが示唆された。遅延テストの結果からは、中日2言語間</p>			

の形態類似性が、聴覚呈示される漢字単語の処理の促進要因であることが示された。日本語発音の評定結果では、事後・遅延テストで誤答率が低下する傾向がみられた。

実験 2 では、中級の中国人学習者が、中日の同形類義語 500 語と同形異義語、異形異義語 200 語の計 700 語について、単語シャドーイングを遂行した。その結果、語彙判断課題でも読み上げ課題でも、事後・遅延テストにおいて反応時間の短縮と処理パターンの変容がみられた。日本語漢字単語の音韻処理と意味処理に形態類似性による促進効果が生じた。日本語発音の評定結果に関しては、形態・音韻類似性の低い単語の誤答率が事後・遅延テストで低下した。日本語漢字単語の音韻表象の形成度が増大し、形態表象と音韻表象の連結関係が強化されたことが推察された。

実験 3 では、上級の中国人学習者が、中日の同形類義語 900 語について単語シャドーイングを遂行した。その結果、語彙判断課題でも読み上げ課題でも、事後・遅延テストにおいて反応時間の短縮と処理パターンの変容がみられ、日本語漢字単語の形態・音韻表象の連結関係が強化されたことが推察された。遅延テストでは両課題において、形態類似性の高い単語が低い単語よりも反応時間が短く、形態類似性による促進効果もみられた。

第 3 章では、3 つの実験の結果について総合考察を行った。本研究の中国人学習者では、初中級、中級、上級のどの習熟度においても、単語シャドーイング遂行後の事後テストで、語彙判断課題と読み上げ課題の反応時間が短くなった。単語シャドーイングを通して、日本語漢字単語の形態・音韻・意味情報が連合的に豊かな記憶痕跡を形成し、日本語の形態表象と音韻表象の連結関係が強化されたと言える。日本語発音の評定結果では、初中級と中級において事後・遅延テストの誤答率が低下したが、上級ではその傾向はみられなかった。単語シャドーイングで期待される効果と、その導入時における学習者の習熟度に応じた条件設定の必要性を教育的示唆として述べ、本研究の意義と今後の課題をまとめた。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 先行研究で解明されてきた中国人学習者の中日 2 言語の心内辞書モデルを理論的枠組みとし、語彙判断課題と読み上げ課題の反応時間を主な測度として体系的な実験を行うことによって、単語シャドーイングの遂行が、日本語漢字単語の形態・音韻・意味情報の連合的な記憶痕跡を豊かにし、日本語の音韻表象の形成度を増大させ、形態表象と音韻表象の連結関係を強化する可能性が高いことを明らかにした。
2. 従来、中国人学習者の日本語漢字単語の処理に関しては、中日 2 言語間の形態類似性による促進効果とともに、音韻類似性による抑制効果が報告されていた。しかし、中国語音からの干渉を小さくする学習法については、提案の段階で留まっていた。本研究は、その学習法の一つとして、視覚・聴覚情報の同時呈示による単語シャドーイングが有効であることを実証的に明らかにした。
3. 単語シャドーイングによって変容すると考えられる日本語漢字単語の処理過程について、初中級、中級、上級の中国人学習者に対応した心内辞書モデルを再構成し提案した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。